

## 二十年：文苑

著者	中川，泰雄
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 2
ページ	4 3 - 6 1
発行年	1911-10-22
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6250">http://hdl.handle.net/2298/6250</a>

## 文苑

二 十 年

中 川 泰 雄

(一)

山深き里の夏の日足は蜩に鳴き立てられて峯に沈んだ。谷の向ふの山の尾に暫し止つた名残の光りが消ねる。夕闇は闊い翼を張つて静々と舞ひ下つた。叔母とた鳶とは隣の部屋で何かして居た、宗助は二人の眼を避けるやうにして宿を出た。谷川の岸へ立つと冷々した風が彼の熱した顔を心地よく吹き拂ふ。谷の奥に當つて山の中腹から闇をぬいて瀧がかゝつて居る。此の温泉場に來て二週間は既に過した、宗助の日誌の中に「瀧に行く」と書いてないのは一日としてない。今亦彼の足は自然にその方に向つて進んで居るのだ。

宗助の頭の中には今色んな考がゴチャ／＼に入れ乱れて居るので、彼は只もう、赤い色、物なづかしい香、あたたかな光、それ等に充ちた果てしのない野の中を幻のやうに迷つて居る氣がする。

三拾分程前の事だ。夕餉をすまして毎もの通り叔母と文學に關した話をして居た。話が一寸途切れた時叔母は思ひ出した様に、

『宗さん、あなた逆も覺ては居ますまいネ、あなたがまだ此椅子の高さ位しかない時分に私に「母ちゃん」

つて呼びかけなすつた事がありましたかね……』

宗助は驚いて叔母の顔を見つめた、そして「覺て居る、あれは自分に取つて終世忘れられない思出を作つた一事件だ」とは思つたがわざと

『よく覺て居ませんよ』と言つた

叔母さんは遠い昔の夢を思ひ出さうとするらしく美はしい顔をあげて空を眺めて居たが

『宗さん………今となつては私を「母ちゃん」と呼んで下さいませまいね………打明けた話したが私の家を繼いで下さいますまいか、實は今度私が遙々下つて來たのもそれがためですがね。』

宗助の渾身の血は一度に湧き立つた。叔母の氣質は豫て知つては居たがこんなに眞正面から切りこんで來ようとは思はなかつた。

『御父さんや兄さんにも御相談しましたがね、宗助の心次第で御勝手になさいと言はれるので………』  
叔母は寸分の隙間もなくつめかけて來る。

『何分一生の大事ですからよく考へた上で………』

此場合宗助には此れ以上のことは言ひ得なかつた。そして間もなく散歩に出かけたのだ。

宗助は大きな石の轉つて居る川邊を歩き／＼考へた。

『實の所自分には何も異存はないのだ、むしろそなたの方がよいと考へて居た位だ、何故先刻あの場で承知しなかつたらう、たれも妙な男だ』

瀧の前に突き出た平たい岩がある。宗助は無意識的に其上に上つた。

彼は毎日此岩の上で默想にふける習慣だつた。

默想と言つた所で何も纏まつた事について考へるのではなくて只恣に空想の糸を引き伸べて行くのだ。

宗助は小さな時から暇さへあれば空想を画く癖があつた。相當に理解力も出來常識も進んであまり突飛な空想のあまい天地に入り耽る事の出來ない筈の廿才の今日すら、ともすれば其中に樂を見出して味氣ない現實の自我を忘れやうと勉めて居る、酷く言へば空想に生きて居る哀れな人間なのだ。

「よく考へよう、そして決定しよう」と思つて此所迄來たのだが、實は宗助の心の底には叔母の申出を聞いた瞬間にそれを快く容れた或物があつたのだ。

『實に妙だ、叔母さんとなれとの間をつなぐ無形の糸はどうしてこんなに強くて複雑なのだらう?』。差當つて決定す可き問題があまり無造作に解決されて居たので宗助はその方は打捨て、仕舞つた。そして幼い時から叔母と自分を中心として起つた事件の跡を追つて回想した。

彼は微細な事迄よく覺えて居た。未來に樂しき空城廓を築くに慣れた彼は過去にも悦しき隱遁の館を有して居るのだ。

幼い宗助は何も知らぬ間に母を失つて居た。

只其時の印象として今尙殘つて居るのは、澤山人が居て紅い造花をいくつも持つて寺に行つた。そして自分は或女の人に抱かれて焼香した、と言ふ事だけである。

其後幾年か立つ間に人の口から母の事を聞きなどして悲哀の念は早くから宗助の胸に刻みこまれた。それを

教へた一人は葬いの時に彼を抱いて居た美しい女であつた。

宗助の家から二三町距つて大きな宅があつた。

何時となしに彼は其家へ足繁く遊びに行くようになった。梢をそろへた竹のま垣に添うて門に入ると白砂の撒いてある道の兩側が花畑になつて居る。そこにはよく天氣のよい日などは茶色の頭巾を被つた老人が鍬をバチ／＼鳴らして植木の手入をして居た。「頭巾のわぢいさん」は宗助の來たのを見るとニコリとして

「静枝！宗坊が來たぞよ」

と言ふ、すると向ふの離れの窓がスツツと開いて中から宗助を抱いて焼香した女が白い手を伸べて「わいで／＼」をする。石段をはう様にして上つて行くと女は宗助を抱き上げて池や野の見渡される其室で色んな嘶をして聞かせたり、繪や菓物をやつたりした。

彼は其女を「しづ姉さん」と言つて居た。

或秋の日の夕暮であつた。宗助は獨りで其女の所へ行つた。門口には米を積んだ荷馬車が幾臺も止つて居た。家の人達は皆忙しさうに見えた。宗助は其頃から遠慮がちだつたので家へは入らず其まゝ花畠をぬけて池の汀に出た。其所には大きな銀杏の木があつて風のまに／＼黄い葉をはら／＼と降らして居た。深紅色のみこし草が咲き亂れた銀杏の根方によりかゝつて宗助は池を越えて眼を放つた。すべてが静かだつた。小さな弱い胸を刺し通してしみ入る寂しさだつた。池の向ふは黄色い野が眼のかぎり擴がつて居る。白い雲の凝固こじどまつて居るあたりは小しばかりの山が蒼く野を限つて居る。池の水はスツキリと澄んで底深く咲く水草の莖にもつるゝ小魚の數も數へらるゝやう。小波一つ立たない。宗助は恰も乳の甘い香にむされて母の懷に眠る子

の如くウツトリとして眺めて居た。

かたへの小藪で實をあさつて居た小鳥がチ、と鳴いて立つた。彼は小鳥の姿をつけて見て居ると平野をひく／＼、芒の穂が腹に觸る位にどんで行つて見なくなつた。宗助は昨夜「しづ姉さん」から聞いた白鳩の嘶を思ひ出した。

神様の御使の白鳩の親子が一寸した過失から神様の御機嫌を損て、聲が出なくなり、谷を距てた殊山背山に分れ／＼に住まねばならぬと言ふ物悲しいはなしだつた。

宗助の敏感性と聯想癖は其頃から萌して居た。

彼は白鳩のはなしを客觀的にのみ考へては居なかつた。小さい胸をいだいてうなだれると熱い涙が塞いだ眼眶を押し分るやうにして溢れ出る。

赤や青や色々な玉見たやうな物が有るが如く無きが如く眼の前にチラ／＼する、其中からいつぞや夢に見た顔が一寸現れかけてすぐ消れて仕舞つた。數日前の夜宗助は「しづ姉さん」の部屋で遅く迄嘶しをして貰つた、聞いて居る内にウト／＼と寝入つた。

何でも馬鹿に高い山の上を宗助は小鹿の様に走つて居ると峻しい絶壁に出會した。其谷を距てた向ふの峯には香のいゝ大きな花が眞白く咲いて居る。見て居る間に一番大きな花から煙がムク／＼上つて人間の顔になつた。見た事のある人だが誰だか思い出せない。それが消れると又表れた。それは曾て繪本に出て居た人だと思つた。幾つもの出来ては消れる中に「しづ姉さん」の顔が出来た。

「姉さんだ／＼」と悦んで見て居ると其面の輪廓が次第に變つて平生寫眞で見知つて居る——實物は勿論覺

はない——母の面輪に成つた。

宗助は狂氣のやうに「母ちゃん!!」とばかり躍り上る途端に谷へドツと陥つた。目が醒めてみると身体中汗でズク／＼になつて居て、横には「しづ姉さん」が有明の光を浴びて寝て居る。今にも其顔が母の顔に變つて行くかと思つめ乍ら、尙夢心地で

「母ちゃん!!」と二三度呼びかけた。

姉さんは直ぐに目さめて起直りさま宗助の額に掌を觸れて、愛らしさうに宗助の面を見守つた。

『宗ちゃん、御母さんの夢を見たのでしょ、それとも私を御母さんと思つて下さるの? 夜更けに目の醒めたのは心細いものですね……………少し熱があるやうです冷めてはいけませぬよ』と言つて搔卷をよく着せて呉れた。

今一寸現れかけて消えたのは其夢に見た亡母の顔だつた。「消えるな／＼」とあせつた甲斐もなく二度と現れなかつた。

氣つかぬ間に人の氣配は近くにあつた。頭をあげて見るとつい近くの堤の上に「しづ姉さん」が野菊の束ねたのを持つて此方を見て居る。しづに咲いた秋草の精が浮き出たかのやう。後に思へば其時の姉さんの衣の裾模様はよく秋の野に調和した色合だつた。宗助があわてゝ顔をそむける間もあらせず姉さんは歩み寄つた。

『宗ちゃん、どうかなすつたの……………』

宗助は黙つて姉さんの胸の邊をみつめた。姉さんは何とも言へぬ温かさの籠つた眼つきで宗助を見下して居

たがやがて袂から香のふりこんだ手布を出して宗助の眼のあたりを拭つて呉れた。

『宗ちゃん!!』姉さんは静に座つて宗助の側によりそつたをして顔をさし覗く様にし聲をひそめて、『御母さんが戀しいの……私が居ても矢張り淋しいの?』

宗助は矢張り黙つて居る。ポーッと汗ばんだ上に木立を通して這る夕日を受けた姉さんの顔は一層あでやかだつた。

先夜の夢をみて以來宗助は姉さんと亡母との間に何等かの關係——余程接近した血統上の——が有つたのでは無からうかと思はれてならぬ。

慈母の愛と言ふものに久しく飢ゑた、否殆ど知らない宗助は只夢心地で居た、そして抱きよせらるゝまゝ姉さんの胸に顔を埋めた。姉さんが自分の肩を撫でゝ居ると言ふのは自覺したが何を言つて居たのか聞けなかつた。

其日以後宗助は其女を世の中で最もなつかしい人だと思つた。彼に始めて悲哀を教へた女は次になつかしい心を教へたのだ。

宗助は殆毎日姉さんの所へ遊に行つた。近所の男の子等はよく彼をからかふので隠れるやうにして行きゝした。彼より八才上の兄などは

『宗ちゃんは静枝さんとの養子ださうな』

と言つて皆を笑はせた。

年が暮に迫つて家々は春まついとなみに忙しかつた或夜だつた宗助は「しづ姉さん」の部屋で炬燵にあたり



まつて居た。外では前日から降りつづいた雪に竹の折れる音が凄く聞えた。姉さんは福壽草の小鉢をのせた火桶の横で縫物をして居た。

姉さんの手に自動的に働かせられる針が折々冷たく光つた。

『宗ちゃんは今二タ晩寝たらいくつになります？』

宗助は其日下女に教はつた通りに五本の指を出して『これ丈けと半』と答へた。姉さんは笑つて

『半とは可笑しいね、五年六ヶ月ですか、すると私よりも十三と少し年下ですね』

やがて姉さんは縫物の手を止めて宗助の横から炬燵にあたまり乍ら、ちつと宗助の横顔を見て居たが

『宗ちゃん……………私が遠い所へ行つて歸つて來なくなつたら淋しいの？』

よい心地になつてウト／＼として居た宗助はむ／＼と頭を上げて目を見張つた

『何處かへ行くの、ね、いやだ／＼姉さんが居なくちあいやだ』

『行つても直ぐ歸つて來たらいいでしょ、それでもいけない？』

『よかない／＼いやだ姉さん、何處へも行かないで居てよ！』

宗助はからだをゆすつて泣き出した。そして無意識に姉さんの袂を小さい手で搦んだ。姉さんは何か考へ込んで居たが急に笑顔を作つて宗助を抱いた。其あつい柔軟な頬に自分のを擦着けて

『姉さんは何處へも行けはしませんよ。そして宗ちゃんと二人でいつ迄も毎日遊びましようね』

と慰めた。宗助はやつと安心して姉さんに抱かれたまゝ重たい眼眶をつむつた。姉さんが少し身じろぎしたはづみに、又眼を開いて大きな聲で言つた

『姉さん居るの?』

『居ますよ、ここに、何處へも行きはしませんよ』

子供は落ついて寝た。

年が明けて間もなく姉さんは「頭巾の小父さん」と宗助の父と其他の人々に連れられて他所へ行つて仕舞つた。姉さんの御母さんが宗助の家へ來て

『靜枝は、わざと宗ちやんに會はずに出發たちしました。これは宗ちやんにと言つてあれが縫つたのですから……』と言つて先夜宗助とはなし乍ら姉さんが仕立てゝ居た襦袢を出した。

姉さんが居なくなつたと知つた宗助の落膽はどんなだつたらう。食事もせず一日中炬燵の中にもぐり込んで泣いてばかり居た。夕方兄が來て炬燵蒲團を引っぱいで仕舞つた。兄は多少抵抗して火のつくやうに泣くにも關はらず無理に宗助の手をひいて寒い野路を歩かせた。

雪に覆はれた英彦山が廣い平野を壓して屹ただて居た。連丘の落窪には所々に残りの雪が夕日に輝いて見えた。何處からか鐘の音が響く、宗助は眼を上げて見た。野末の枯芒の上に白い旗や紅い花が動いて行く。葬いだなど思つた。涙が其まゝ凍りそうな寒い風が吹く。宗助の頭は少し靜まつた。

『宗ちやん、たまへ男だろ、靜枝さんが居なくなつた位でそんなに泣くようぢや大將にはなれないよ』  
だとか

『此叢で雉の子を捕とらつた事があつたが覺おぼわてるかい』

など言つて兄は弟の心を轉ませさせやうと勉めた。然し宗助はそんな簡單な言葉で心の大きな空虚を充みす事は

出来なかつた。ふ、く、ま、返詞もせず泣き乍らついて歩いた。頭の中では姉さんは今頃何處で此寒い風に吹かれて居るだらうかと思つた。

『たまへ一体姉さんは何處へ行つたのか知つてるのか』

兄が斯う言つた時に宗助は泣き止んで稍注意して耳を傾けた。

『姉さんはね、此あいだ私の家へ來てたまへが大好きと言つた北海道に居る叔父さんの御嫁さんになつたのだよ、もう余程以前から約束だけは出來て居たのだ』

宗助は急に機嫌が直つて、生々した聲でたづねた

『本當に、そいぢあ姉さんもうちの親類？』

『さうだ、よく知つてるね、それでもう是からは「靜姉さん」など言つちあいかない「叔母さん」と言ふんだよ』。

宗助は悦しく思つた。しかし何となく不満な氣がした。

當分の間 宗助は矢張りその人を噂する時には「姉さん」と言つて居た。

十日程經て父や「頭巾の小父さん」が歸つて來た。

父は

『宗坊！叔母さんからたまへにやつて呉れとの事だ』

と澤山にもちやの入つた箱を出した。

いつの間にか十五年近い月日は過ぎた。もどかしき程長くもあつた。また驚く迄短かくも思はれる。例へば人まつ戀のつれづれ、せめてしばしとかなづる琴の一節に、長しとかこつ秋の夜も、袂の露のまだ乾ぬに、くだかけの聲を聞くそのやう。此長い月日を宗助は一度も叔母に會はなかつた。叔母が歸國した時はいつも何等かの事情で彼は居なかつた。勿論會はうと思へば如何にでもして會はれるのだが強いて會はうとせない理由があつた。

それは慙ふだ。極端な美に焦れる時代に宗助も到達して居たので更でだに空想的な彼の頭は叔母を叔母と思ひたくなかつた。「時」と言ふ觀念を欲却して昔自分に御伽噺をして呉れた「しづ姉さん」なる者だけを心に深く刻みこんで置きたく思つた。

それで今更「叔母」と言ふ名稱の下に彼人と會つて其變つた姿を見たら、自分が能ふ限り美化して心に秘めて居る「静姉さん」が損せらるればせぬかと恐れて居たのだ。

然しそんな馬鹿げた考は年と共に漸次亡びて來た。

折々は窮屈な字をならべて時候見舞の手紙など出した。然し眞の情は表れて居なかつた。

『何故ありのまゝの感情を書かない？昔は彼人を世の中で最愛な人とも思つた、有難い人とも思つた、それを其まゝ紙に寫して心から謝するそれが虚偽だらうか、罪惡だらうか、何と言ふ意氣地無しだ』宗助が叔母に音信する時はいつも慙う思つた。けれど何だか妙な氣兼ねから得書かなかつた。

宗助が中學の寄宿舎に居た時分「頭巾のねぢさん」は亡くなつた。「しづ姉さん」の兄になる人は一家を引

いて東京に行つて仕舞つた。其年の夏休みに宗助が歸省すると兄が

『宗助行つて見ろ、あの家は解いて仕舞つたよ』と言つた。「母病めり」と聞く者のやうに取りあへず屋敷跡を見に行つた宗助は豫想外な變り方にひどく絶望した。彼れに多くの樂しき思出をかました家は形もなく取去られて居るし、せめてもと思つた銀杏すら伐り取られて居た。宗助は夏草のしげみを分けて昔「しづ姉さん」の居た室の床下と覺しき所に咲いて居た晝顔の花をつんで歸つた

此夏のはじめ宗助が家からの手紙を受取つたのは高等學校の學年試験が今二日で終ると言ふ晩だつた。差出人は兄であつた、極めて手短かに「先日から北海道の叔母が小間使を連れて逗留に来て居るにまへの歸るのを待つて溫泉に行くそうだ。試験の終り次第歸つて來い」と言ふ意味のものであつた。宗助は其夜直に行李をととのへて置いた。

二日と言ふ日子を宗助は只もう祭を待ち焦れる子供のやうにして送つた。試験などどうでもよいと思つた。汽車が故郷に近づくに従つてなつかしい訛りを耳にするにつけて、今更しみづと懷舊の情が起る。見る物皆自分をくすぐつて無理にでも悅ばせよう笑はせようとして居るかの如く思はれる。

誰彼の別なく隣席の人等と話して見たくなつた。窓の外を見乍ら、靴の踵で床を輕くたゝいて「なつかしき山見ゆ、なつかしき野邊見ゆ、

夕日さす森かげ、小鳥むれて……」

と小さな時に覺けた歸省の歌を唄つて見た。

停車場に降りると荷物は其まゝにして黄昏時を俾にも乗らずトボ／＼と村の方へ歸つて來た。濕氣を含んだ

生暖かい風が柔かく顔をなでる。幾重にも重なつた雨雲が静々と峯から麓へ下つて来る。

鈍い、寂しい、陰氣な奥に潜んだ悦び！

宗助はフト曾て此んな夕暮、こんな心で、こんな景色を眺めて居た事があつたやうに思つたが思出せなかつた。

家についたのは全く夜だつた。塀の白塗だつたのが灰に塗變へてある事などは宗助の注意を呼び起すに値せなかつた。

怪物めいて立つた白揚の陰から家の様子を窺ふと母屋の方はひっそりとして居た。植込を距てた離れ家に女の晴々しい笑聲が重たるい空氣を通して聞ゆる、宗助は他人の家に入る思でその方へ行つた。落葉松や高野槇の木下闇を通つて行くと

「らむではあるまいらしたろ？」

と言ふ叔母の聲がはつきり聞き取れた。

宗助は胸の血が湧き返つて、頭が冷却するやうに思つた。築山の裾を巡ると部屋の有様が見ゆる、美しい笠をかけたランプの下に叔母は何か書いて居た。今一人見知らぬ若い女が歌の本らしい物を讀んで居た。

宗助は何とも言はずににこりとして靴脱の上に立つた。足音に驚かされた兩人は同時に顔を上げて宗助を見た。

叔母の容姿は十五年と言ふ年月に對して左程著しく變つて居なかつた。宗助は何となく安心した、そして小供が無く心配がないからだらうと解釋した。

叔母は豫期以上な宗助の變り方に驚きのためか又誰だか思ひ出せなかつたか、暫し無言で宗助の面を見つめて居たが、やがてそれと知つて「たや」と言つたまゝ尙ほしげ／＼と見て居る。

宗助は叔母の眼の底に其昔銀杏の木の下で「宗ちゃん」と言つて自分を見つめた時と同じ物なつかしい輝を見出した。

悦ばしさに堪へぬ様子で叔母が立出て來て

『まあほんとに大きくなつて——』

と言つた。

宗助は椽に上つた。叔母よりはるかに丈が高かつた。

#### 四

此温泉に於ける二週間は後日宗助が自分の過去を顧みた時樂しき時期の一つとして思出すに値したものであつた。

或時は川底の砂を銀の衣被かつきのやうに洗つて行く急流に舟を放つた。野葡萄や眞葛の緑が兩側から壓する中を舟は矢の如く下り三人共冷やかな水に手を差し伸べて岸邊のヒヤシンスを取りなごして遊んだ。小間使はた薦と言つて口數の少ないしとやかな女だつたが舟遊びの折には面白さに浮れてか北海道の歌だと言つて『忍をし路高島及びもないが——』と唄つた。

散歩から歸つた後などはよく蚊遣の煙に咽せ乍ら叔母と和歌について色々批評したりなごした。時として二人の間に意見を異にする處があつた。叔母は「それは違つてるでしょ、恁うではないですか」と盛んに自分の

説を主張する。元來宗助は「いや」を「いや」とキツバリ言ふ事をすら敢てせぬ穩和しい性質の男だ。それでそんな場合には、自分が正しいと思つても、「そうでしょかね」と軽く受けて居た。何れ後になれば自分の説が正しいと分つて來るだらうと言ふ氣なのだ。叔母は此返詞を受けた時は何だか物たらぬ顔付をして「にまへ何と思ふ？」とたゝねを顧るが常だつた。たゝねは只「私などには分りませぬ」と言ひ／＼した。

又或時はこんな事もあつた。

峯から吹き落ちて來る心地よい風に、宗助は午睡の夢冷やかにさめた。「叔母さん」と呼んで見たが隣室からは何の返事もないので手拭を取つて獨で浴室の方へ降りて行つた。廊下の曲り角で湯女に出會した。よく宗助の室などに來て永らく座りこんではなす肉太の女だつた。

「叔母さんは？」と問ふと「少し以前に召使さんと活花の百合をさがすと言つて錦原の方へ行かれました」と言つた。

男湯の方には誰も居なかつた。板壁で隔てた女湯の方もひ／＼して居た。廣い薄暗い浴場は只泉のこぼ／＼と湧き出る音のみで充されて居た。

湯の中に入つた宗助はのけ／＼に思ふ丈け手足を伸ばした。

溶けるやうな氣持になつて天井の隅を見つめて居るとフト或夜或所で四五人の友と會した時其一人が「あの温泉は昔の墓所の趾から湧き出て居るので男湯には美女の幽靈が出る、今でも出る、折々浴客が湯壺の中で見なくなる」と眞面目で語つたのを思出した。馬鹿げた話したとは思ひ乍らも其氣で聞けば泉の音も亡者の叫びと思はれる。いやな氣がしたので紛らさうと勉めると又々此頃本で讀んだユリアの姿が頭に浮ぶ。



白蠟のやうな肌の色、十五才のあどけない笑を含んだ口元、それが死後百年を経て生前其まゝ、今にも蝶の羽風が觸れたら目を覺ましそくに、冷たい大理石の棺に横つて居る。

宗助は自分の手足を見まわした、自分も何だか棺に横はつて居る氣がしたからだ。

「若い時の叔母さんの姿ならユリアにふさはしい。若しそれが死屍になつて恚して居たら丸でインド人の土左衛門だ」と私かに笑つた。そして又考へた「土左衛門と言へば「草枕」の中に出て居る畫家も温泉に入つて浮いたり沈んだりし乍ら土左衛門の歌を唄つた。其時に「なみさん」が妙な眞似をしたのだつた。此湯にもあんな性格の女が居て今にも向ふから裸体で現れて來ないかしら、これもあの歌を唄つて見よう、現れて來るかも知れない」と思ひ／＼例の「草枕」の歌を小聲で言つて見た。我乍ら驚く程バツと擴がつた反響を湯場一つばいに傳へた

「雨が降つたらつめたから……………」

次の句を言はうとする途端に女湯の方で湯をかく音がしたと思ふ間もなく板壁の端れからにこやかに笑つた女が半身を横ざまに現した。

宗助の頭の中では「幽霊」「ユリア」「なみさん」「叔母」など何れを何れ識別しかねてゴチャ／＼に入れ乱れた。

「宗さん一人で何を言つてゐるのです」

居ない筈の叔母だつたと知つて宗助は尙驚いた。

「叔母さん錦原に行かれたと聞きました」

「はあ、行きかけましたがね 何だか氣が進まないのてた薦をやつて私は先刻から湯に入つて靜にして居たのです。今の歌は何です？」

「死人の歌です。恁して湯に浮いてると何だか死体の様な氣がしますね」

「私はね沈然と湯の湧く音を聞いていると板一枚下は底も知れない古井戸か何かありそうでね……………」  
言ひ乍ら叔母は体を引いた。

## 五

『涼しさが過ぎて寒くなつて來ました子』

叔母さんは瀧のしぶきに幽かに沾つた浴衣を撫で乍ら言つた。

『そろ／＼歸りかけましょう』宗助は先づ岩から下りた。扶けるために手を差し出したが女は二人共譯なく下つた。

今山の端を放れた月が瀧の水煙を横合から照らした。三人が踏んで行く飛石の間を漂ふ水に落した影は碎けつよりつ銀を溶かしたやうにゆらめいてゐる。

つい先刻宗助が岩の上で空想に入り耽つて居る時に叔母はた薦を連れて瀧の所へ來た。そして宗助に例の事に對して考がついたかと問ふので宗助は快く要求を容れると答へた。叔母は非常に悦んだ。十年以來の宿望が達せられたなど言つた。其時宗助は「叔母はまだ若いと言はれる年であるのに、自分如き年に大差ない人間を子にするなど少し早計ではあるまいか。そして又それが叔母の意志から出た事か又は叔父の意志から出たのか問ふ必要がある」と考へた。しかし何だか妙に氣がひける間はずに居た。何れ時機を見て問はう／＼と

思ひつゝ先に立つて河原を歩いて行つた

『此瀧で昨年若い人が不治の病を苦にして投身したとか言ふ事でゐいます予』とた蔦が言つた。

『そんなに死を急がずとも、どうせ病氣で死ぬのだつたらうに』

宗助が獨言のやうに言ふと叔母が

『だつて自分の肉体が癪れて行くのを沈然と見て居る苦痛には耐へきれぬでしよ』

『それぢや、つまり衰滅を恐れて絶滅を招く譯だ。それなら人間は達育の盛りが過ぎたら老衰を見ずに自殺するが幸福ですか……』

叔母は呆れた顔附で一寸宗助の横顔を眺めて

『まああんなことを！理屈からいつたらそうでしよ』

一寸何か考へて居たが又言葉をついで

『しかし……こんな話がありますよ、或時子供が二三人寄つてそれ／＼自慢ばなしをして居たと言ふのです。中に一人紳士の子が居て「うちの阿父さんは外出なさる時は毎もステッキを突いて出なさる」と言ひますとね按摩の子が「われの父つさんだつて始終ステッキを突いて出かける」と言つたそうです。按摩の子の言つたのは無理もないですね、けれど何だか可笑しいでしよ、あなたの御説だつて無理はないけど變です予、まあ兎に角可愛そうです』

宗助は大聲をあげて笑つた。た蔦も笑つて居た。三人は影をつらねて露けき草の小路を歩いた。

瀧の音が遠ざかるに従つてあたりは水を打つたやうに靜かになつた。スイチヨが草むらで啼き始めたが我れ

と我聲に驚いたかはたと止めた。

『此所にもあきましたネ、明後日あたりから海岸の方にでも行きませうか』叔母はつまらなさそうに言ふ。

『さうしませう。温泉よりあ潮風に吹かれる方が身体が引しまるですよ』

しば、無音が續いた。

『たや大きな星さまが流れて』

(完)

## 漢

## 詩

寓 歎

一、二、丙 崔

士 傑

明月良朋思。秋風游子心。逸從勞處得。樂向苦中尋。時局熾如火。光陰貴比金。年來無寸進。階下又蟲吟。

偶 成

全 上

豪傑無非明世故。聖賢只是近人情。尋常滋味參難透。出語何須作不平。

秋 夜

全 上

一彎明月弄清輝。淡々銀河星影微。獨倚孤桐涼意透。蟲聲滿院晚秋歸。

秋 郊 野 望

全 上

禾黍離々到眼秋。西風颯爽火星流。青山一髮雲橫斷。黃葉寒秋鳥亂投。原上草枯愁蟋蟀。嶺頭日暮下羊牛。

煙波浩渺蘆花外。明月娟々上釣鉤。